

回集 七之助 (前後二篇の  
内前篇六卷)

芦屋時代映畫

紹介

第一百二號

大江戸悪人捕物張と云ふ恐ろしい眉書の付く流行の盜賊劇だが「稻妻小僧」とり纏ての點に於て一段落ちる映畫である。主人七之助が覆面である事が余り見え透いて居る事、七之助の惡事に同情が持てない事などはこうした譚りに禁物ではあるまいか。馬場春吉氏の脚色並監督はまだこうした映畫の呼吸を好く呑み込んで居るとは思はれない。又無理な場面も少くない。辻堂で七之助が梅吉に捕はれる件りや女役者の家で籠抜けする邊りなどその例である。然し吉原の場面は比較的上出来であつた。市川百々之助氏の七之助は御家人と云ふ柄でないので、何してもそれらしく見えないが覆面になつての活潑は相變らず御ひいき筋をヤンヤと云はせて居る。芦屋桃子嬢のお光は「稻妻小僧」と同じ様な役だが素直な演技が好い。其他阪東豊昇氏・東京子嬢等例に依つて例の如くと云ふ他ない。吉原大門のセットは素晴らしい立派なもので異彩を放つて居る。

山本 純葉

興行價値 帝キネの弗箱百々之助の得意の亂闘劇であるから、好くつても悪くつても客の方から押しかけて来るであらう。(八月十九日大阪芦屋劇場封切)